

遺跡としての白杵石仏

—石仏周辺の発掘調査の成果—

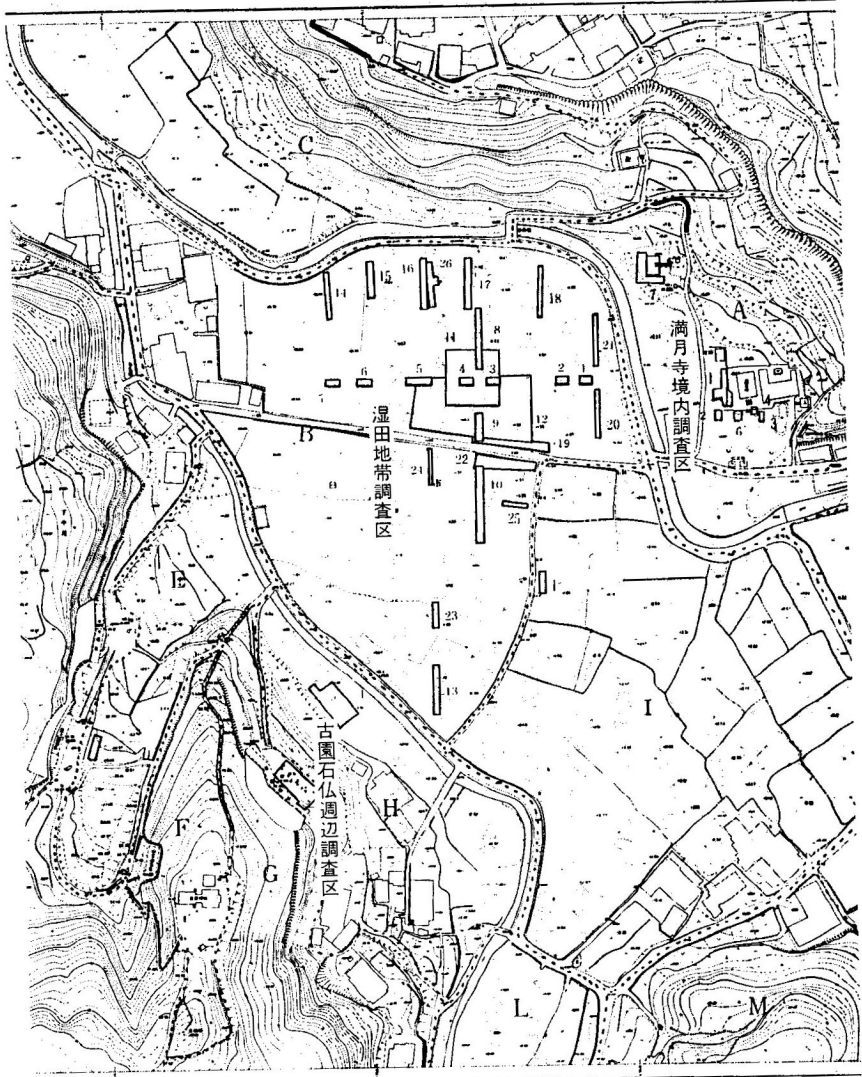
菊 田 徹

一 はじめに

この調査は、白杵磨崖仏の東面に広がる湿田地帯に、石仏周辺の環境整備を主目的とした公園建設が計画されたため、磨崖仏あるいは寺院等に関連する埋蔵文化財の有無を確認するために行ったものである。

この調査によって、現満月寺境内、国の重文指定を受けている宝篋印塔（通称、日吉塔）周辺、古園石仏周辺、湿田地帯などから礎石建物跡、掘立柱建物跡、工房跡、土壇跡、井戸跡、溝跡等の遺構とともに、日常雑器としての土師質土器や中世陶器、中国製陶磁器、瓦などの遺物が多量に出土した。これらの遺構や遺物の発見によって、今まで謎の厚いベールに覆われていた磨崖仏の造頭と寺院との関連性やその時代性が、少しづつではあるが明らかにされつつある。

過去、石仏周辺地域で行われた調査とえば、大部分が美術史的立場からのものが主で、考古学的見地から石仏の造頭、寺院との関連性、またその時代的背景にまで論究したものはほとんどなく、考古学的調査も行われていなかったのが現状であった。こうした状況の中、はじめて石仏周辺地域で本格的な発掘調査が行われ、多くの遺構や遺物を発見したということは大きな成果であり、今後の白杵磨崖仏研究における新たな方向を示したものと言えよう。



第1図

調査区配置図

一 記録に見える石仏周辺遺跡

この遺跡、特に、磨崖仏の造蹟に關しての記録は今のところ皆無である。寺院（満月寺）に關しては、中世末、近世の二・三の資料の中にわずかではあるが記録を見出すことができる。しかし、これらの記録の中からは、寺の創草や廢絶の時期、またその伽藍配置や規模、石仏と建物の關係について知ることはできない。寛保元年（一七四一）、大田重澄によって著わされた「白陽寺社考略記」、寛保二年安樂寺密雲による「豊鐘善鳴録」、唐橋世齊等による「豊後国志」などの資料によると、深田村にかつて満月寺と總稱する寺院があり、この寺院の中には、「祇陀院、療病院、施藥院、安養院、快樂院」なる五院が、また、「本坊悟樂坊、南坊、東坊、岡坊、川口坊」の六坊が存在していたと記されているが、その配置並びに存続の時期等について明らかに出来る記述ではない。その中で一つの建物跡ではあるがその規模についてわずかにうかがうことができる記事が「白陽寺社考略記」の中に認められる。それによると、「……本坊釈迦堂今存ス本堂七間四面之礎石二重今尚有……中略」とあり、本坊の名称とその規模について触れている。昭和五年から二ヶ年にわたって行つた満月寺境内の発掘調査では、寺の現建物の下層から新旧二時期にわたる礎石建物跡が発見された。このうちの新期に属する建物跡は、東西七間、南北七間の規模を有するもので、前述資料の中で見られる建物規模に關する記事との類似点を見出すことができる。しかし、古代・中世における建物の間面記法と近世のそれとを比較した場合、その意味は異なる。前者における「七間四面」とは、内陣正面の柱間が七間で前後左右の四ヶ所に庇が付くことを意味し、後者の場合には、正面と側面の柱間を示している。すなわち「七間四面」とは正面七間、側面四間をあらわし、必ずしも七間四方ということの意味しているのではない。したがって、調査の結果得た新期の建物跡の規模と資料に見える建物規模とを同一視して捉えることはできないが、近世臼杵地方における建物の間面記法、すなわち、「何間何面」という表現が一般的に「何間四方」を表わす表記法であるということが、より多くの資料の中から理解された場合には、本記録を再検討する必要がある。次に、満月寺の存続年代についてであるが、「大分県

史料」第二十五卷「清原宜雄所藏文書」の天正十五年（一五八七）の条に「満月寺増拜書状」の記録が見え、これによると當時満月寺の増拜なる僧が伊勢参りの先達として活動していたことが記されている。この記録から満月寺は十六世紀の末頃まで確実に存在していたことがわかる。このことは、発掘調査によって出土した遺物からも裏付けられる。しかし、この時期の遺物の量は、前代の遺物の出土量に比して極端に減少する。この時期の遺物が全体的に減少しているという現象は、十六世紀末における満月寺の勢力がかなり衰退し、かつ草創の時期に比べ伽藍規模も縮少していたことをうかがわせる事実ではなからうか。この点を明らかにしてゆくためには、今後さらに考古資料を蓄積してゆくことと、新たな文献資料を見出し、出てゆくことが望まれる。

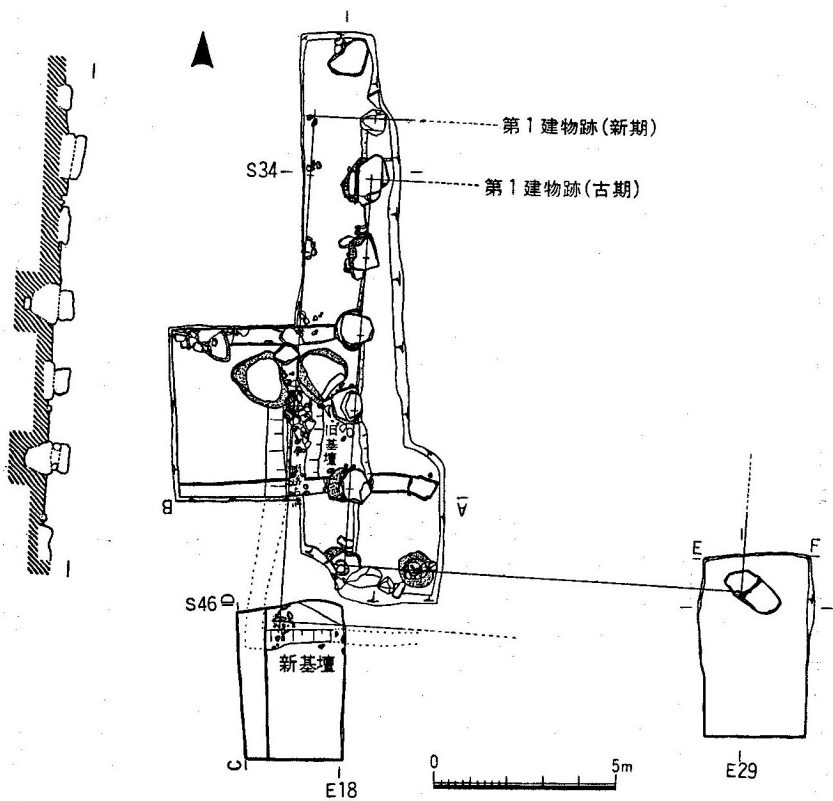
三 発見された遺構

現在までの調査（第1〜7次調査）によって発見された遺構は、礎石建物跡七棟、掘立柱建物跡二五棟、掘立柱列四、工房跡一、井戸跡三、土壇跡一七、溝跡六条、特殊遺構などがある。調査区域によって発見される遺構の種類と数に違いを見せており各地域の占地による遺構の性格の相違などが推察される。ここでは各調査区における主な遺構についてその概要を述べてみたい。

(1) 現満月寺境内調査区（第1・2区）

この調査区で発見された遺構には、身舎の柱位置が重複する新旧二時期の礎石建物跡がある。旧期建物は、東西五間、南北五間の身舎部分に凝灰岩の礎石を用いた建物跡である。礎石を安定させ、据えるための根固め石が認められる。礎石は、旧地表面あるいは基壇盛土の上に据えられ、盛土をまわりから寄せることによって位置の安定がはかられている。建物は東西総長一〇・九〇m、南北総長一〇・六〇mをはかる。

新期建物は、旧期建物の西側柱列の礎石の上に珪質岩あるいは硬質砂岩の礎石をのせ身舎の柱位置を重複させ、さらにその



第2図

満月寺境内調査区礎石建物跡実測図

外側（西南・北）を一間（約一六六cm）分広げた建物跡である。東西七間（推定総長一四・二〇m）、南北七間（総長一三・九〇m）をはかる。

新旧建物跡とも方向は西側柱列で発掘基準線（真南北方向）に対して北で三度三〇分東に偏している。

(2) 古園石仏周辺調査区（第一図）

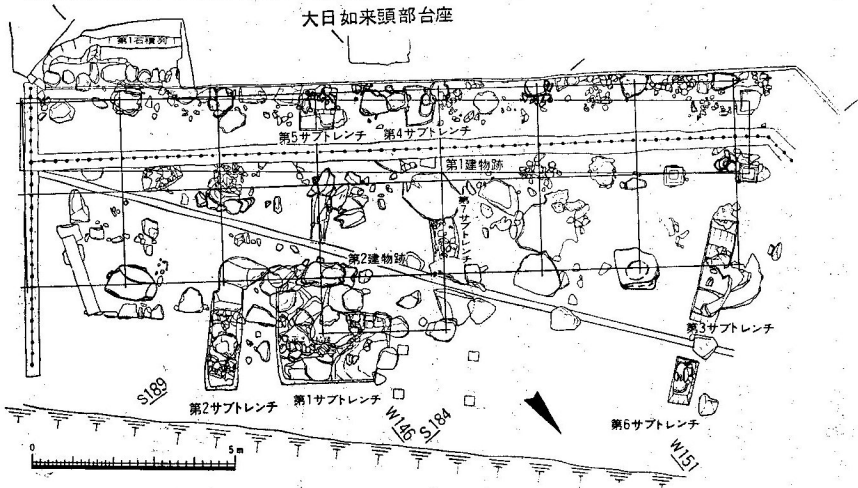
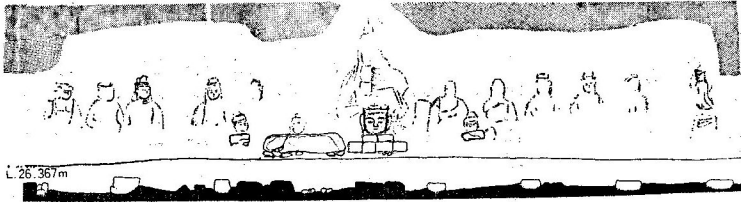
この調査区で検出された遺構には、礎石建物跡、石積列、道路跡などがあるが、そのうちの礎石建物について述べてみたい。

イ 礎石建物跡（第三図）

岩に取り付く柱間を含めると梁行三間、桁行七間の建物跡である。桁行中央部の柱間が他の柱間に比べ約三〇・三cm広くなる。さらに、この中央部分（大日如来像前）の北側柱列の北側には向拝と考えられるような一間分（梁行方向で一・三六m、桁行方向で三・〇三m）の広がりを持っている。現存する礎石のうち南側柱列のものは、ほとんど珪質岩あるいは、硬質砂岩などの類であるのに対し、この列より北側の礎石は凝灰岩が主である。また、南側柱列の礎石と北側柱列のものでは高さを異にする。後者の方がおおむね五〇〜七〇cmほど低くなっている。この種列の西から二番目の凝灰岩礎石中央部分には、満月寺境内調査区で発見された二重構造をもつ礎石同様、石の中央部に窪みが彫られているところから、この上にもう一つ礎石をのせていたと考えられる。したがって、南側柱列の礎石より低くなる北側のものは、もう一つの礎石がのっていたと推察される。南側柱列の礎石は、赤褐色の地山上に根固め石を置き、その上に礎石を据え、土器や瓦を含んだ黄褐色土をまわりに寄せた位置を安定させているのに対し、北側柱列の礎石は、地山がこのあたりで急に下がることもあってか地山上にはなく、大きな凝灰岩を多量に含んだ暗褐色の盛土層中に据えられている。また、南側柱列の礎石に取り付いていた黄褐色土は北側柱列の礎石の一部をおおっている。

(3) 湿田地帯調査区（第一図）

この調査区から発見された遺構には、礎石建物跡、掘立柱建物跡、工房跡、土壇跡、井戸跡、溝跡、特殊遺構などがある。



第3図

古園石仏周辺調査区磁石建物跡実測図

この調査区が最も遺構の密集している所で、しかもその八割以上が柱穴である。ここでは、その柱穴によって構成される建物跡や工房跡について述べてみたい。

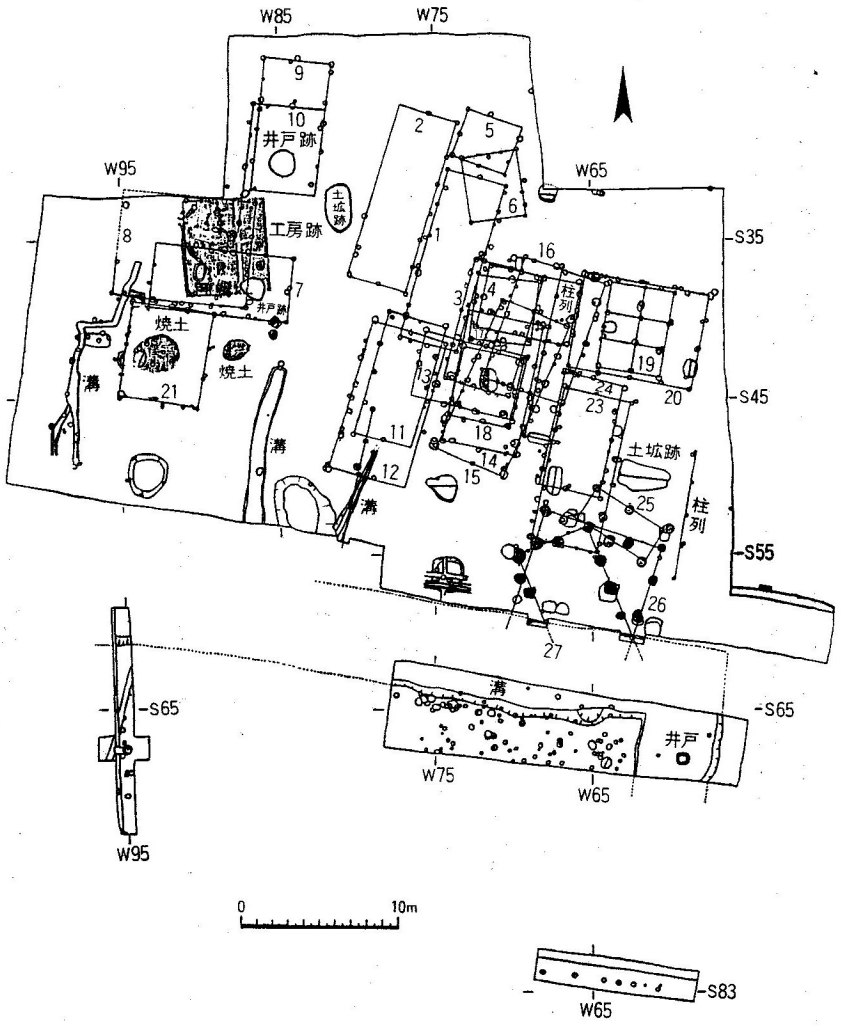
イ 礎石建物跡・掘立柱建物跡（第四図）

礎石建物跡（第25・26・27建物跡）は、調査区の南東隅付近に集まっている。礎石は、後世の開田等により排除されたものらしく残ってはいないが、平面形が隋円あるいは形のくずれた方形を呈する礎石の据方や抜き取り穴が認められる。据方や抜き取り穴等から推定できる柱間寸法は、おおむね統一性がある。

掘立柱建物跡（第一、24、28建物跡）は、調査区の東側と西側に大きく分けてとらえることができる。それぞれの建物の柱穴は、直径二〇〜五〇cmと大きさにばらつきはあるが、平面形はおおむね円形を呈している。また、個々の建物跡の柱間寸法に統一性はない。東側に集中する建物跡は、ほぼ一定の範囲内において、ほぼ方位を同じくし、多くの重複関係が認められる。これに対して西側では東側ほどの重複はない。この東側と西側との違いは、出土遺物の面にもあらわれている。前者は、中国製陶磁器が主に出土するが、後者ではこの陶磁器がほとんどなく、そのかわりに鉄滓が多量に出土している。このように建物配置のあり方や出土する遺物に違いが認められるということは、両地区における建物の性格の相違をあらわしているものと言えよう。

ロ 工房跡（第四図）

調査区北西部分で検出されている。遺構の東半部が削平されているため、全容を明らかにし得ないが、現存する規模は東西四・〇m、南北六・五mにある。北西の一部には、黄褐色の盛土による整地層が認められる。また、南西隅付近には径四〇cm、深さ二〇cm程度の漏斗状のピットがあり、そのまわりには長軸一・一mの馬蹄形を呈する焼面がある。焼面が切れる部分には、このピットに接して、徐々に深みを増してゆく窪み状の穴が続いている。この焼面や窪み状の穴の西側には、幅二〇cm、深さ一〇cmほどの断面がU字形をした溝がある。溝中からは一・〇〜一・三m間隔に並ぶ直径二五cmほどの小柱穴列が検出さ



第4図

湿田地帯建物跡配置図

れている。さらに、溝と柱穴列とに囲まれた北東部には、盛土による整地を施す際、意図的に配されたと考えられる礎、凝灰岩などによる集石が認められる。

四 出土遺物

本遺跡から出土した遺物には、土師質土器、瓦質土器、中世陶器(常滑系の甕・備前系の甕・播鉢)、中国製陶磁器、鉄製品(釘・楔・やり鉋等)、鉄滓、銅銭(北宋銭の淳化元宝・至和元宝等)、石製品(フイゴ羽口、砥石、石鍋)、木製品(曲物の底板、木札等)、瓦などがある。ここでは、特に特徴的な遺物である瓦について特記しておきたい。





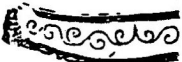






瓦は現満月寺境内、宝篋印塔周辺、古園石仏周辺調査区から多量に出土している。種類としては、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鬼瓦、熨斗瓦などがある。このうち、文様瓦は、瓦当文様から系統的に区分することが可能で、軒丸瓦は六種類、軒平瓦は五種類にそれぞれ分類できる。文様の構成、出土層位、他の遺跡から出土した文様瓦との比較から分類瓦の時代的变化を見てみると、軒丸瓦は、三ツ巴の頭が小さく、長い尾が互いに接するものから徐々に巴の頭が大きく、しかも尾が短くなるものへ、軒平瓦は、連珠文から形の整った蕨手風の唐草文へ、さらにこの唐草文が次第に退化してゆくものへと文様がそれぞれ年代的に変化してゆくことがわかる。分類した軒丸瓦、軒平瓦の組み合わせと年代的位置づけは第2表のような図式が考えられる。しかし、表のⅡ期に属する瓦については、なお資料不足の感があり、その員み合わせに若干の問題が残されている。この点については、新しい資料の蓄積をまわって検討したい。

五 まとめ

この遺跡の調査によって、臼杵磨崖仏の造頭に深いかかわりをもつ寺院の存在を明らかにしてゆくための資料となる遺構や遺物を発見した。その主な遺構・遺物の概要は先に述べたとおりである。ここでは、検出された遺構・遺物から得られた知見

に基づき若干の推察をも交え、遺跡について概観してみたい。

この深田の地には、満月寺と総称する寺院があり、そこには五院六防があったと資料（註1）の中で述べられている。この記録をすべて肯定することはできないものの、この調査をとおして、伽藍の一部を構成していたと考えられるいくつかの建物

		年代	軒丸瓦	軒平瓦
I	前半	鎌倉時代 前期 (13C前半)	I類 	I類 
	後半	鎌倉時代 後期 (13C後半) 南北朝時代 (14C前半)	II類  III類 	II類  III類 
II	期	室町時代 前期 (14C後半) 後期 (16C代)	IV類  V類 	IV類  V類 
		III	江戸時代 (17C以降)	VI類 

第5図 出土文様瓦の組み合わせと年代

跡を発見している。その代表的とも言えるものに、現満月寺の西側で発見された新旧二時期で瓦葺きの礎石建物跡や、古園石仏前面の広場で検出された単なる覆屋とは考え難い大規模な礎石建物跡、そして、湿地地帯からは、礎石等はすでないが、据方や抜き取り穴などからうかがえる礎石建物跡などがある。伽藍の中における個々の建物の性格づけについては、この調査の結果から言及することはできない。だが、礎石建物であること、そして瓦葺きであったという点から見れば、これら三地域から発見された建物は、それぞれが伽藍を構成していた主要な建物であったといえよう。近年、賀川光夫氏はこの調査の結果を踏まえ、寺院および古園石仏前の礎石建物跡の性格について、

「古園石仏前から発見された礎石建物はその規模から見ても単なる覆屋とは考え難く、衆僧が仏事を行った金堂跡であると、さらにホキ石仏は、阿弥陀を中心に彫られ西方に位置して浄土をあらわすという意味から阿弥陀堂が、山王山石仏は東方に位置する薬師如来を中心とした三尊形式と見て、薬師堂のあった場所であろうと位置づけられ、満月寺とは谷間の中央に占める堂舎と磨崖仏覆堂を含めた広大な伽藍配置をもつ石仏寺としての性格を持ったものである」と論じられている。

次に、礎石建物の時期であるが、出土瓦の様相から推して現満月寺の境内発見の古期建物は鎌倉時代の初頭、新期建物（建替え期の建物）は室町時代の初め頃、古園石仏周辺の建物は、鎌倉時代初期をあまり下らない時期にそれぞれ建てられ、伽藍が徐々に整えられていったものと考えられる。また、湿地地帯から発見された礎石建物跡についても、周辺から出土する瓦の様相から推して先に述べた二地区の建物と創建の時期をほぼ同じくするものと思われる。このほか、注目すべき建物群として、湿地地帯から検出された掘立柱建物跡があげられる。建物の配置と重複関係並びに出土遺物等の違いについては先に触れたとおりである。調査区内と東側と西側における建物配置と出土遺物の相違は、この区域で検出された建物の性格を考慮する上で重要な意味を持つ。すなわち、東側においては出土遺物の中心が陶磁器であり、西側では鉄滓をはじめとした鉄製品であるということから東側には僧坊あるいは食堂といった生活関係の遺構が、西側は、工房などの生産関係遺構があったと考えることができよう。

次に、建物が一定地域において同一方向の重複を見せているという点については、一定地域において建物施設の性格等の違いによって占地の規制を受けたために、おのずから建物の配置も決められ、同一方向への重複になったものと推察される。この場合、重複には二つの要素が考えられる。一つは、鎌倉期と室町期という長い年月にわたり、同一地域内において変遷していった場合、二つ目は、ある限られた時期に集中して建てられた場合である。谷間の低い土地という自然条件を考慮すると個々の掘立柱建物の存続時期は短く、しかも、同一方向への重複という点からすると、重複関係にある建物の時期は比較的近い関係にあったと考えられる。これは出土遺物の上からもうかがえる。平安後期（十二世紀後半）の遺物も多少含まれるが鎌倉期（十三世紀）と十四世紀初頭）に属する遺物（中国製陶磁器、土師質土器、中世陶器、瓦等）の出土量が多く、室町期になると遺物の量は減少し、中でも十六世紀代になると激減する現象が認められる。このことは、先にも述べたように重複関係にある建物や他の生活遺構の大部分が、ある限られた時間の中で、それも鎌倉期という比較的限定された範囲の中で変遷していったことを裏付けるものであろう。さらに、十六世紀代において遺物の出土量が激減するということから、寺院勢力の衰退、すなわち寺院の財力と伽藍規模が縮小したために、この時期の遺物の出土量が減少したと見ることができかもしれない。今回の調査では、磨崖仏の造頭年代や満時の有統年代等について明らかにし得る直接的な資料を得ることはできなかった。しかし出土遺物等から磨崖仏に関係する寺院としての満月寺の建物が十二世紀後半頃から建てられはじめ、十三世紀初頭の瓦葺建物によって一応伽藍の体裁が整えられ、徐々に建物の変遷をたどり、かつ伽藍規模の縮小をみながら十七世紀前半頃まで存続したと考えることはできよう。

以上、発見された遺構や遺物によって遺跡の概要や問題点について述べてきた。しかし伽藍の配置や規模、個々の建物跡の性格、また磨崖仏の造頭年代等の関係を明らかにするためには、まだまだ資料不足の感がぬぐえない。これらの説明にあたっては、新たな文献資料の探索、考古学調査の成果に期したい。

註一 「豊饒善鳴録」や「豊後国志」の中では五院名が、「白陽寺社考略記」の中では五坊名が記されている。

参考文献及び論文

- (1) 「白杵石仏群地域遺跡発掘調査概報Ⅰ～Ⅴ」白杵市教育委員会一九七六～一九八〇
- (2) 菊田徹「白杵石仏周辺遺跡の発掘調査」白杵史談第七三号一九八二、一一
- (3) 「白杵石仏群地域遺跡発掘調査報告書」白杵市教育委員会一九八二
- (4) 賀川光夫「大分県の磨崖仏」『白杵石仏の造願と熊野大日石仏の姿態』『郷土史展望』一九八二
- (5) 倉田文作、田村圓澄、賀川光夫他「大分の古代美術」大分放送一九八三
- (6) 小泊立矢「二豊の宗教と文化―美術」『大分県史―古代編Ⅱ』一九八四、三
- (7) 賀川光夫「白杵磨崖仏造願の背景」史学論叢第一五号 史学科創立二〇周年記念号一九八四、六

〔白杵市教育委員会社会教育課〕

大分県地方史料叢書(七)

「縣治概略」(Ⅰ)

「縣治概略」(Ⅱ)

大分県成立以来の布告・達を集大成した
県草創期を知る基本史料

(会員各二五〇〇円、会員外各三〇〇円)

発行者 大分県地方史研究会

大分県地方史料叢書(七)

縣治概略Ⅲ

(完結)

大分県成立期の布告・達を集大成した
地方史研究者必備の書。
本巻は明治八年分を収録する。

(会員一五〇〇円、会員外二〇〇〇円)

発行者 大分県地方史研究会